


e-ビジネスを実現する ソフトウェアサービス技術

Software Service Technologies for Making e-Business Real



ソフトウェアサービス技術への
いざない

SOAP

UDDIとWSDL

.NETフレームワーク

ebXML

RosettaNet

編集にあたって

青山 幹雄

南山大学 mikio.aoyama@nifty.com

山岡 正輝

(株) NTTデータ yamaoka@rd.nttdata.co.jp

高島 洋典

NEC y-takashima@bu.jp.nec.com

本特集は、ソフトウェア技術分野で現在急速に発展しつつある「ソフトウェアサービス技術」に関する全体像を示す。

インターネットの「どこへでも繋がる」特性は、企業間のB2Bから消費者やユーザへのB2Cにいたるグローバルな電子商取引を可能にした。さらに、バックオフィスを含むビジネス全体の電子化、すなわち、e-ビジネスの実現へ広がりつつある。この潮流は、企業活動にとどまらず、政府や社会活動全体へ波及する。これは、e-ソサエティと呼んでもよいであろう。

今、このようなe-ビジネス、e-ソサエティを実現するソフトウェアがどうあるべきか、さらに、今後予想される高度で多様な要求を短期間で満たす開発技術はどうあるべきか、が問われている。

ソフトウェアアーキテクチャと開発技術の観点では、1990年代は、クライアント・サーバアーキテクチャと、1980年代から進化してきたオブジェクト指向技術、そして、その上の分散オブジェクト環境、コンポーネント技術が実用化した時代といえる。これらの技術は生産性の面で大きな進歩である。しかし、クライアント・サーバとその上の分散オブジェクト環境アーキテクチャは、プラットフォームに依存し、その適用範囲が限定される。

これに対し、インターネット上のe-ビジネスが求めているのは、プラットフォーム、言語、プログラミングモデルによらない、真の相互運用性である。ソフトウェアサービス技術は、これらのプラットフォームなどの実装情報を隠蔽し、XMLをベースとする新たなソフトウェア層の上で相互運用性を実現する技術である。

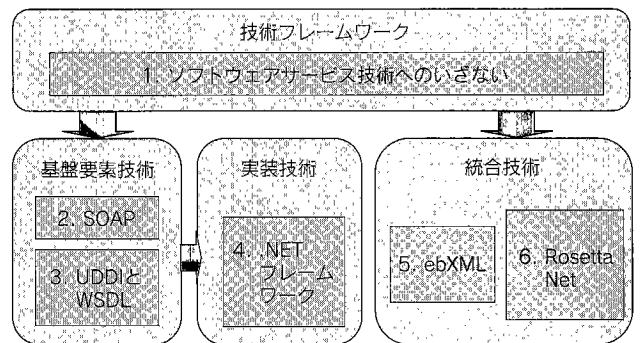


図-1 特集の構成

JavaとXMLの技術の進化を背景に、2000年から、Webサービスと呼ばれる一連の技術が提案され、ソフトウェアサービス技術の重要性と実現性が認識されるようになった。現在、この分野は、ソフトウェア技術で最も活発に研究開発が進められている。

XML全般に関する特集は、本年の情報処理7月号にある。本特集は、e-ビジネスを実現する新たなアプリケーション開発技術に焦点を当てて、より深い知識を提示するものである。

本特集は6編の解説からなる。各解説の位置付けを図-1に示す。

最初の「ソフトウェアサービス技術へのいざない」は本分野の全体像を示す。「SOAP」、「UDDIとWSDL」の2編はソフトウェアサービスを実現する基盤要素技術を解説する。これは、Webサービスとも呼ばれている。「.NETフレームワーク」はソフトウェアサービス技術の1つの実装例である。さらに、「ebXML」と「RosettaNet」は、それぞれ、電子データ交換(EDI)や電子部品業界のサプライチェーン構築などの目的から出発し、その中に多様な技術を統合した技術である。

これらの技術は、e-ビジネス、e-ソサエティの実現のためにソフトウェアに求められている本質的な問題を解決しようとしている。その意味で、技術そのものが重要である。さらに、ここで開発されているビジネスディレクトリ技術などはビジネス面でも重要である。本特集を契機に、我が国の技術者、研究者がこの分野へ関心を持ち、参画されることを期待する。

なお、本特集は、会誌編集のA-WGとS-WGが共同で企画した。企画を始めるにあたってご協力いただいた、東京工芸大学の宮田一乗氏、日本IBMの森本康彦氏に感謝します。

(平成13年8月19日)